



1. はじめに

今回「何か書きなさい」とのことで、かつてアカデミックではない冊子に掲載する用に調べたものがありましたので、それを掲載したいと思います（結局その冊子には掲載せずにお蔵入りしていたものです）。唐突な内容ですが、「大僧正」という位階を軸として国家と仏教の関係について概観してみたいと思います。日本に於ける大僧正位に関して述べる前に、仏教教団がどのような組織を持っていたかを概観します。

2. 仏教教団の役職

基本的に仏教教団は七衆と呼ばれる人々によって構成されています。即ち、比丘、比丘尼、沙弥、沙弥尼、式叉摩那、優婆塞、優婆夷の七種です。

このような仏教教団を運営するに当たり、寺院内ではいくつかの役職が設定されてきました。インドへ渡った中国唐代の僧侶である義浄によって著された『大唐西域求法高僧伝』の中にはインドの仏教教団の状況が描かれています。以下は、現在のインドビハール州でかつて隆盛を極めた那爛陀寺（ナーランダー寺）についての記述です。「寺内は但最老の上座を以つて尊主と為して……但造寺の人を名づけて寺主と為す、梵に毘訶羅莎弭といふ。若し番直を作し寺門を典掌し及び僧を和し事を白するものは毘訶羅波羅と名づけ訳して護持と為す。若し榿稚を鳴らし及び食を監する者は名づけて羯磨陀那と為し訳して授事と為す。維那と言うは略也」¹。即ち、インドの那爛陀寺に於いては上座、寺主（毘訶羅莎弭）、護持（毘訶羅波羅）、授事（維那 / 羯磨陀那）といった役職が設定されていたことが伺えます（毘訶羅莎弭や毘訶羅波羅はサンスクリット語の音写であり、例えば毘訶羅莎弭はサンスクリット語の *vihāra-svāmin*（翻訳すれば「寺院の所有者」）、毘訶羅波羅は *vihāra-pāla*（「寺院の守護者」）であると考えられます。

3. インド、中国に於ける僧侶の階位

これらは寺院内での役職であり、僧都や僧正といった呼称に関して述べているものではありません。インド仏教に於ける僧侶の上下関係に関わる記述として義浄の『南海寄帰内法伝』の記述を見てみましょう。義浄はこの書の中で、インドと中国の間の作法や儀礼の異なりについて多く述べています。その中で、僧侶の上下関係に関しても触れています。基本的に、法臘（ほうろう。比丘、比丘尼となってから夏安居を過ごした回数）が若い者、つまり僧侶である期間が短い者が下の者となります²。ただし、師事するための法臘が上の者がいなかった場合は、自分より法臘が若い者に師事しても良い³、という様にフレキシブルなものです。しかしながら、ここにも僧正などの呼称は見られません。

では、中国仏教の文脈ではどの様に僧侶の上下を示しているのでしょうか。この問題に関しては僧官の役職名が問題となり、時代や地域の差異によって官名が存在し、甚だ複雑な様相を呈している為部分的に先行研究を見るに留めさせていただきます。

『支那中世佛教の展開』中の山崎氏の言葉を借るならば、僧官は「国家又は一地方内の仏教教団の統制監督を目的として、中央乃至地方政権が任命せる出家の官」⁴であり、仏教教団の管理を目的とした地位であると言えます。中国南北朝時代に於いてはこの僧官には北朝系統と南朝系統があったとされ、「扱て南朝宋代では既述の如く東晋の系統を引き、僧官には多く僧正及び僧主なる呼称を混用したが、齊代では寧ろ僧主と称するものが多く、梁以降は僧正といった様である」⁵ともあるように、僧正という呼称は南朝系統のものと考えられます。

そして今回の主題である「大僧正」という呼称に関しては「梁初の僧正として『続高僧伝』六に立伝されている慧超は……大僧正といはれた人である。彼の没する前年即ち普通六年（五二六）その大僧正の任は法雲に継がれた」⁶とされます。梁代に用いられたこの「大僧正」という地位がどのような立場にあったかの詳細は不明ですが、この時代が「大僧正」初出の用例の様です。

4. 日本に於ける僧侶の階位と大僧正位

日本に於いて僧正、僧都といった僧官が出る例としては『日本書紀』中の推古32年（632年）の記述が挙げられます⁷。そこでは、僧正、僧都、法頭の各々1名が設定されており、法頭は「仏寺の名籍の作成・保管にあったと考えられる」⁸とされるものです。そして後に僧正や僧都に大少（小）が付加されていき、天武12年（684年）の記録には律師の語が現れます⁹。

日本に於いて大僧正に最初に任ぜられたのは行基であるとされ、これが天平16年（744年）あるいは17年（745年）の出来事です¹⁰。この大僧正位が具体的にどのような役割を負った地位であるのかは明らかではありません¹¹。

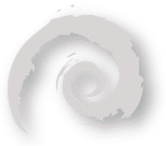
5. 国家と仏教

さて、ここまでごく簡略に仏教僧侶の階位に関して見てきました。これら階位は国家と仏教の間のある関係を視野に入れることで理解可能なものであると言えるでしょう。中国・日本仏教ほど国家と仏教の結びつきは強力なものとは言いがたいですが、インドに於いても、例えば龍樹（Nāgārjuna）が時の王に宛てたとされる *Ratnāvalī* や *Suhrillekha* といった著作が残る様に、国家と仏教の関係は分かち難いものと言えます。例えば、先の *Ratnāvalī* 内でも、「王よ、いかなる行いであっても、法を先とし、法を中間とし、法を後として、それらを全うするならば、この世にあってもかの世にあっても衰滅することはありません」¹² といった様に、龍樹は仏教思想を以て王に進言を行っています。

歴史的に、国家というバックボーンによって強固に支えられた時に仏教は隆盛を誇ってきたと言えます。大僧正という位階の存在に関しても、この国家と仏教の関係の上にあるものと考えられます。

【注】

1. 大正蔵No.2066 5c21-5c27. 足立喜六訳注1942『大唐西域求法高僧伝』岩波書店 p.99
2. 大正蔵No.2125 221c11-221c23. 宮林昭彦・加藤栄司訳『現代語訳南海寄帰内法伝』法蔵館 pp.248-251
3. 大正蔵No.2125 222a28-222b3. 宮林昭彦・加藤栄司訳『現代語訳南海寄帰内法伝』法蔵館 pp.258-259
4. 山崎宏1942『支那中世佛教の展開』清水書店 p.475
5. 前掲書 p.482
6. 前掲書 p.490
7. 井上光貞1965『日本古代国家の研究』 pp.333-335. 田村圓澄1969『飛鳥仏教史研究』塙書房 pp.54-57。
8. 田村圓澄1969『飛鳥仏教史研究』塙書房 p.56。
9. 井上光貞1965『日本古代国家の研究』 p.340
10. 井上薫編1997『行基事典』国書刊行会 p.543. この大僧正位に関して中井氏は「なお大僧正は、天平十七年（七四五）に行基が任ぜられて以来、天元四年（九八一）に良源が補されるまで補任の事例を欠き、「別授」の職であった」と述べています。（中井真孝「奈良時代の僧綱」『日本古代の国家と宗教 上巻』 p.170）
11. 井上氏は「多分に名誉職的な性格がつよいと思われるが、当時玄昉が僧正の地位にあったため、あえてその上位に位置づける政治的意図があったとも考えられる」と推察しています。（井上薫編1997『行基事典』国書刊行会 p.543）
12. 梶山雄一、瓜生津隆真訳2004『大乘仏典14 龍樹論集』中央公論新社 p.266



松村 淳子（東洋大学仏教会会員）

スリランカの訪問は、数えてみると今回で8回目になる。2回目（2008年12月）に古都アヌラダプラで開催された仏教学会に参加したときに知り合った、ナンダラタナ長老のお寺に住まわせてもらいながら、今回はスリランカのバティックや紅茶、香辛料などについて知りたくて、3泊4日の旅をしてきた。一日目は東洋大学の鈴木信幸さんの紹介で連絡を取った、アルナ・キールティ博士をケラニヤ大学に訪ねたのだが、何と彼は2008年の学会で私に会い、私が司会を務めるセッションで発表をしたとのこと、また副学長に合わせる段取りをしてくれていて、その建物に入ろうとしたところで、なかなか様子の良い老紳士に話しかけられた。アショーカ・デ・ソイサ教授で、ドイツで学位を取られた方だったが、ゲッティンゲン大学のベッヒェルト教授主催の「仏滅年代論シンポジウム」で私に会ったことを覚えていてくれたのだ。皆々の記憶の良さに恥じ入るとともに、なんと世界は狭いのだろうと改めて思い知らされた。

さて、そこからキャンディに着いて「クイーンズ・ホテル」にチェックインしたが、まさに19世紀半ば頃のイギリス風建築で、何より驚いたのが映画で見たような金属製の蛇腹ドアのエレベーターだった。乗り方は、二重の蛇腹ドアを外側、内側の順に開けて、乗ったらやはり同じ順序で閉めること、そうしないとエレベーターは動かない。目的階へ着いたら内側・外側の順に扉を開けて、外へ出たらやはり同じ順で閉めなければならない。そうしないと、他の階の人がエレベーターを呼ぼうとしても動いてくれないからだ。時々締め忘れる人がいるらしく、ホテルの従業員が階段を上がって締めに行く。新型コロナウイルスのせいで、宿泊客はとても少なく、ホテルもガラガラだった。そう言っでは悪いが中国人がいないのは気分が良かった。というのも、彼らはスリランカの食べ物を口にしないので、由緒あるトップクラスのホテルでも、スリランカ人が宗教上食べない豚肉や牛肉を供するようになってしまったからである。ただ自分も東アジア人なので、避けられたり差別を受けたりしないか少々心配だった。



さて、スリランカ・バティックというものがインドネシアから技術が伝わって、独自のスリランカ・バティックが出来上がったという話は聞いていたが、今回は、最初にインドネシアでバティック（ろうけつ染め）を学び、スリランカの伝統的なデザインや彼女自身の独創的なデザインのバティックを創り出した最初の女性、イーナ・デ・シルヴァ（1922-2015）のヘリテージ工房と彼女の住居を訪れることができた。場所はマータレー（Matale）の郊外の深い



自然の中、ガイドさんが知人から場所を聞いていっても、番地も目印もほぼないとこで、目につくような看板すらなかった。やっとのことで探しあてたところは深い林の中の小高い丘の上で、敷地内にはイギリス風の庭があり、まず大変気品のある老婦人のところへ案内された。そこでイーナ・デ・シルヴァという女性がどのような人であったか説明を聞き、彼女を称える写真と文章の入った本を買わせていただいた。イーナは、マータレーの由緒あるアルヴィーハーレー家（アルヴィハーレーは紀元前1世紀ごろ仏典が歴史上最初に書かれた寺として有名）の出身で、とても聡明で美貌の持ち主だったので、優秀な警察幹部でスポーツマンのオズモンド・デ・シルヴァ氏（タミル人だったとのこと）に一目惚れされ結婚したため、一族から破門されたとのことだった。それでも彼女はバイタリティー溢れる女性で、スリランカを代表する建築家ジェフリー・バワ（Geoffrey Bawa）とも親交があり、バワが最初に建てたのは彼女の家だった。この二人は、